

有不盡誣者焉○下

略

〔嘉永明治年間錄〕嘉永六年七月十七日、彗星出現天文方建白并巷說、

十七日酉上刻に現し戌刻に不至是を彗星水火の星、兵亂の兆と、巷說紛々たり、廿四日後不見、昨十七日初暮、西の方より北に寄、地平上凡八九度計相離れ、三尺計り光芒相發見留申候、尤追追連測の上、猶又實測記可奉入御覽候、依之此段申上候、以上、

七月十八日

山路彌左衛門 足立左内 山路金之丞

昨十八日初暮、戌亥の方大凡十度計、大微垣の地に當り、彗星相見、其光芒長三尺計、北斗の内天璣の星の方を尾指申候、依之此段申上候、

七月十九日

澀川助左衛門 同勝司

京都土御門建白書、頃日毎夜、彗星暮後、西北の天に現光芒、凡そ二三尺計、則大微垣の邊に有之宿度は翼宿に候、尤戌刻頃は西の山頭に沒し候、今年春以來時候不順、五月來雨降季候全不調候故、上外の氣結句爲彗星と存候、此頃異國船の風聞等も有之候處、彼是人口種々候へ共勿論、爲差義は無之存候、今暫日數を歷候へば大方西山に隠れ不相見成畢候哉に存候、猶篤と測量の上、若又異變の儀も候はゞ可申上候、

右等の趣内々申上候間、自然御不審等被爲在候はゞ、宜御沙汰相願度存候、

七月十九日

土御門陰陽頭晴雄

〔嘉永明治年間錄〕安政五年八月彗星乾方ニ出ヅ、

此月十日初夜の頃より戌亥の方に彗星出現光芒、至て小さいさし同十六夜に至り見えず、

〔武江年表〕文久元年五月廿二日夜より亥の方に異星現る、光芒堅に延て長し、稻星といふ、其後夜現る、